

教育目標

意欲的に学び、自他を大切にして、未来を拓く生徒の育成

年度末の最終評価

自己評価	教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し 本校生徒の喫緊の課題は、学力向上であり、意欲的に学ぶ姿勢をもたせるため、授業改善に力を注いできた。学年にはあるものの、学習確認プログラムの結果に表れてきた教科もあり、その方法等を全体へとフィードバックできるようにしたい。また、教職員の意識改革と、全生徒の意欲向上をねらって、学校教育目標を刷新し、来年度からの目指す生徒像や子どもたちにつけてい、資質能力を明確にした。この改革を機に、来年度は、小中で取り組んでいる「久世スタンダード」の見直しや、総合的な学習の見直しにも取り組んでいきたいと思っている。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 学力向上を検証する指標について、学習確認プログラムや全国学力・学習状況調査を指標にしてしまうと、経済状況による学力差SES（ソーシャル・エコノミクス・ステイタス）が出てしまうので、学力保障（最低限つけなければならない学力）がつけられているかという観点で比較するべきである。 近年、生徒同士ではそれほど大きな問題にならないことが、保護者が入ることで重大事態へと拡大してしまう傾向がある。当人同士はもちろんだが、保護者への対応についても、丁寧かつ毅然と行うことで、子どもたちの学校生活を守っていかなければならない。

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	10月24日	共同機構久世学校運営協議会
最終評価	3月1日	共同機構久世学校運営協議会

(1) 「確かな学力」の育成に向けて 『学力向上プラン』

重点目標

「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す学習指導の実施

具体的な取組

1. 授業改善

生徒の学習状況を分析し、つけたい資質や能力を明確にした授業改善の実施。

2. 学習規律

本時の目標の徹底や、生徒の自学自習の学習習慣を身に付けさせる工夫をする。

3. 小中連携の推進

合同教科会や合同研修を通じて、生徒の課題やつけたい資質・能力を9年というプランで考える。

また、久世スタンダードという三校が共有している考え方のなかに、コミュニケーションを通して

学力を向上させていくという方針をたて、自己判断力、思考力の育成とともに自己有用感を高めるような工夫を全教育課程のなかで教職員がしていくことを心掛ける。

4. ピア・サポートによる自己有用感の育成

縦割り活動や地域のひとたちとのふれあい活動を通して、自己有用感を高めていくプロジェクトの遂行。

5. 読書指導と図書館活用の推進

読書指導を行い読書習慣を身につけさせる。また図書館利用を通して、本に触れる機会を増やし、調べ学習などのなかで、本の活用の仕方を知る。

(取組結果を検証する) 各種指標

1. 公開授業や合同研修会の実施により、常に授業を公にできる教師の姿勢の育成を図ると同時に学習確認プログラムの分析を行う。
2. 久世ノートを活用して、学習習慣を育成する。
3. 9年間の縦と横、そしてクロスカリキュラムを意識すると同時に、久世ノートの活用をする機会を作る。
4. 行事の遂行と工夫をする。
5. 朝読書の指導の徹底ができているか点検する。

中間評価

各種指標結果

1. 授業改善においては、共通のテーマを設定することでの授業研究を通して、教科や学年を超えた学びの意識を持つことができた。学習確認プログラムの分析は十分にできなかった。
2. 久世ノートの目的を小学校と共有し、久世ノートありきではない家庭学習の充実の仕組みを検討していくことにした。
3. 小中連携の重要な柱として、「学習マネジメント能力の育成」を9年間というプランで考えていき、その手引きを作成していく方向で進めていくことにした。3校合同授業研修会については課題もあるので、合同授業研ありきでなく、よりよい小中連携の研修会を検討していく必要がある。
4. ピア・サポートによる自己有用感の育成においては、少しずつ可能になっている縦割り活動や地域のひとたちとのふれあい活動を現在進めている途中である。
5. 読書指導と図書館活用の推進

特に2年生では、共有スペースに図書を紹介する場所を作り、本に触れる機会が朝読のほかにもあり、朝読の定着が見られる。また、朝読書に集中する為に、朝のタブレットでの健康チェックを廃止したこと、スムーズに朝読書を始められている状況である。

自己評価

授業研究において、共通のテーマを設定したことで、研究協議が活発に行われ、次に積み重ねることのできる授業研究が進められたことが成果である。

しかし、その積み重ねた内容をどのように生徒の学びに繋げていくかがまだまだ課題である。

分析を踏まえた取組の改善

研究としての発信力は問われていると考える。

(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標

1. 授業改善 公開授業を主に、自己研鑽を導ける場の運営
2. 指導者として、わかりやすい授業の徹底と、考えを深められる場面の設定を豊かなもの

	<p>にする</p> <p>3. 9年間の縦と横、そしてクロスカリキュラムを引き続き意識する</p> <p>4. 行事の遂行の状況を鑑みながらも、実施する方向性やできることを探るようにする</p> <p>5. 朝読書の指導の徹底</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>「久世スタンダード」をもとに、9年間を見通した児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を改めて整理し、その資質・能力を身に付けることに向けてどのような取り組みを進めていくのかをしっかりと考えて内容を精査していく必要がある。</p>

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ol style="list-style-type: none"> 授業改善においては、共通のテーマを設定することでの授業研究を通して、教科や学年を超えた学びの意識を持つことができた。学習確認プログラムの分析を定期的に行えるように設定した。 わかりやすい授業の徹底と、考えを深められる場面の設定を行うよう共通理解に努めた。 小中連携の重要な柱として、「学習マネジメント能力の育成」を9年間というプランで考えていき、その手引きを作成していく方向で進めていくことにした。3校合同授業研を、授業研ありきではなく、より良い形にできないかと小学校と連携して検討した。 行事の目的を明確にし、行事ありきではなく目的ありきで進めていくように共通理解に努めた。 継続して朝読書を行うことができた。
自己評価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>新しい学校教育目標を設定し、それに伴う目指す生徒像と身に付けさせる資質能力を明確にできたので、ここからその資質能力をつけさせる為にどうしていくかを検討し実行していく。</p> <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>授業改善、すべての各行事や取り組みが、身に付けさせる資質能力の向上に繋がるように検討していく。目的を明確にし、行事や取り組みを精査していく。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>主体性をもって取り組むことを目標としていかなければならない一方で、主体的に取り組めない子がいるということに注意が必要である。</p> <p>授業の中で担任の先生が、学習のめあては何にするかを問い合わせ、考えさせている場面を見て、子どもの主体性を引き出すための工夫が見られた。</p> <p>学力にはS E S (ソーシャル・エコノミクス・ステイタス) 経済格差による学力差が有意差として実証されており、これは学校で解消できるものではない。従って、学力向上 (同一のテストなどによる比較) という視点ではなく、学習保障 (最低限つけなければならない学力を身につけさせる) という視点を大切にしていくべきである。</p>

(2) 「豊かな心」の育成に向けて

	<p>重点目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 生徒の自己有用感を高め、自尊感情を育てる「ピア・サポート」事業の継続 「おもてなしの心（目の前の人を大切にする精神）」の育成 道徳教育の充実
--	--

具体的な取組

1. 体験的な活動を通して子どもたちの社会性を育む手段として、「ピア・サポート」活動に継続して取り組む。
 - ・他者との関わりの中で、参加するすべての生徒が自己有用感を獲得するよう、年齢の差、経験の差を利用したお世話活動を展開する。(中学生と園児など)
 - ・そこで得た意欲や感情を定着させるため、十分な事前・事後学習の場を準備する。
 - ・行事だけでなく、日常の学校生活や授業の中で自己有用感を高められるような声かけや働きかけを行う。
 - ・校内に3年生をリーダーとした好ましい関係を構築するため、3年間を見通した取組の中で育てる。
2. 「久世教育機関協働協議会」(保育園、小学校、中学校、児童館、図書館)が協働して、あいさつと読み書きを中心に取り組み、育ちと学びの連続性を高める。
3. 「あいさつ」を通して、人と人とのつながりを大切にするなど、コミュニケーション能力を育成する。

(取組結果を検証する) 各種指標

1. 学校評価アンケート

- ⑥「楽しく学校生活を送っていますか」(生徒)
- ⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」(生徒)
- ⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」(生徒)
- ⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」(生徒)
- ⑩「クラスや学校の活動や生活の中で、人の役に立っていると感じていますか」(生徒)
- ⑪「自分には、よいところがあると思いますか」(生徒)
- ⑫「今の自分が好きですか」(生徒)

中間評価

各種指標結果

学校評価アンケート

⑥「楽しく学校生活を送っていますか」	1年 : 5.9 2年 : 5.7 3年 : 5.6
⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」	1年 : 5.5 2年 : 5.1 3年 : 4.7
⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」	1年 : 5.7 2年 : 5.8 3年 : 5.6
⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」	1年 : 5.6 2年 : 5.4 3年 : 5.4
⑩「クラスや学校の活動や生活の中で、人の役に立っていると感じていますか」	1年 : 4.3 2年 : 4.1 3年 : 4.1
⑪「自分には、よいところがあると思いますか」	1年 : 4.4 2年 : 4.1 3年 : 4.1
⑫「今の自分が好きですか」	1年 : 4.3 2年 : 4.3 3年 : 4.2

自己評価	分析 (成果と課題)
	3年生における昨年度との比較を見ると「楽しく学校生活を送っていますか」「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」「相手の気持ちを考えて行動していますか」の項目がわずかではあるが上昇している。「久世中ブランド化計画」と銘打って、子どもたちに地域に誇れる学校作りを

	<p>しようと呼びかけている効果が出ていると思われる。</p> <p>逆に、「クラスや学校の活動や生活の中で、人の役に立っていると感じていますか」「自分には、よいところがあると思いますか」「今の自分が好きですか」の問い合わせには横ばいまたは下降の兆候があり、自己有用感や自己肯定感の低さが改めて浮き彫りとなっている。この項目を改善するためにも、ピア・サポート活動の効果的な取り組みや今までにない新しい取り組みを考案する必要があるのかもしれない。</p> <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>「久世中ブランド化」は機会あるごとに生徒への呼びかけや日常の声かけに反映し継続を図っていきたい。また、昨年度に引き続き、カリキュラムマネジメントの一つとして「学校教育目標の検討」を行っている。本校生徒に足りない力やつけたい資質・能力を各学年で検討し、学校目標検討委員会において絞り込みとまとめを行っている。年内にはその素案を全体へ提示し、最終的に来年度からの学校教育目標として、教職員のみならず、生徒へも周知し、学校全体がその目標に向かって取り組みを進められるようにしていきたい。</p> <p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <p>学校評価アンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥「楽しく学校生活を送っていますか」 ⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」 ⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」 ⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」 ⑩「クラスや学校の活動や生活の中で、人の役に立っていると感じていますか」 ⑪「自分には、よいところがあると思いますか」 ⑫「今の自分が好きですか」 <p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>1年の取組直後は、少し向上したように見える自己有用感が、2年時には減少することを改善するには、チャレンジ体験等で関わった人（事業所の担当者）からの感謝やお褒めの言葉が、本人に届く工夫が必要。</p> <p>普段は、褒められない生徒を褒める工夫をする。そのためには、教員が事前に褒めることを考えておく必要がある。</p> <p>直接関わっていない、例えば他学年の教員などからの言葉かけの方が、自己有用感を向上させやすい。</p> <p>「久世中ブランド化」はとても良い取組だが、目玉になる要素が欲しい。</p>
--	--

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <p>学校評価アンケート</p> <table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;">⑥「楽しく学校生活を送っていますか」</td><td style="vertical-align: top;">1年 : 6.0 2年 : 5.8 3年 : 5.6</td></tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」</td><td style="vertical-align: top;">1年 : 5.0 2年 : 4.9 3年 : 4.5</td></tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」</td><td style="vertical-align: top;">1年 : 5.7 2年 : 5.7 3年 : 5.7</td></tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」</td><td style="vertical-align: top;">1年 : 5.5 2年 : 5.5 3年 : 5.5</td></tr> </table>	⑥「楽しく学校生活を送っていますか」	1年 : 6.0 2年 : 5.8 3年 : 5.6	⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」	1年 : 5.0 2年 : 4.9 3年 : 4.5	⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」	1年 : 5.7 2年 : 5.7 3年 : 5.7	⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」	1年 : 5.5 2年 : 5.5 3年 : 5.5
⑥「楽しく学校生活を送っていますか」	1年 : 6.0 2年 : 5.8 3年 : 5.6								
⑦「自分から進んで、気持ちよくあいさつをしていますか」	1年 : 5.0 2年 : 4.9 3年 : 4.5								
⑧「学校や社会のルールやマナーを守ることを心がけていますか」	1年 : 5.7 2年 : 5.7 3年 : 5.7								
⑨「相手の気持ちを考えて行動していますか」	1年 : 5.5 2年 : 5.5 3年 : 5.5								

	<p>⑬ 「クラスや学校の活動や生活の中で、人の役に立っていると感じていますか」 1年：4.3 2年：4.3 3年：4.1</p> <p>⑭ 「自分には、よいところがあると思いますか」 1年：4.9 2年：4.5 3年：4.4</p> <p>⑮ 「今の自分が好きですか」 1年：4.4 2年：4.2 3年：4.3</p>
自己評価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>3年生においては5項目において前回アンケートより数値が上昇しており、最高学年の自覚と、これまでの積み上げが、数値となって表れてきたものと思われる。一方で、1・2年生については、あいさつの項目で下降しているところが、気になる。また、1年生の人の役に立っていると感じるかという項目は、ふれあい広場などピア・サポートを念頭に置いた取組をしたにもかかわらず上昇していないのは、取り組み後の働きかけや仕掛けがうまくいっていないことを表しており、取組の効果を考えた改善が必要である。3年生になる頃にむけて、成果が現れてくるよう、各学年でのピアサポートプログラム等の取組を継続していきたい。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>今まで本校が十数年取り組んできている、ピア・サポートの取組は、今なお有効で価値ある取組であることは間違いないが、仕掛けをする教員の理解や工夫が足りず、成果につながっていない部分がある。子どもの状況も徐々に変化し、ICT等のめざましい進化の中、今だからこそできる取組方法（ICTの利用など）を工夫し、子どもの成長につながる取組に改善していきたい。</p> <p>また、次年度から学校教育目標を刷新することを機に、全校が共通の目標に向かって取り組み、豊かな心の醸成がさらに進展することを期待する。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>ピア・サポートの取り組みをより活性化させる工夫として、チャレンジ体験後の事業所からのフィードバックや、作品交流に子どもの感想が入れられる仕掛けをするのもいいだろう。さらに日常の学校生活においても、当たり前のことができていることを褒めるなど、自己有用感の向上につながる工夫ができるよう、教職員のスキルアップを図ることが必要である。</p> <p>久世三校で掲げる共通目標である、あいさつについては、地域での活動においても重点を置いている。学校・家庭・地域が共通の認識で子どもたちの指導に当たることで豊かな情操教育ができるよう、PTA活動において各家庭同士のつながりに希薄さを感じる。もっと保護者同士が子どもを中心につながって学校と協力できればと思う。</p>

（3）「健やかな体」の育成に向けて

<p>重点目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 基本的生活習慣の確立 2. 保健教育の充実 3. 防災教育の充実 <p>具体的な取組</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「久世教育機関協働協議会」より、「早寝・早起き・朝ごはん」及び「あいさつ」「家庭内のコミュニケーション」運動を展開することにより、<u>望ましい生活習慣</u>を自ら実践する力を育てる取組の充実を図る。 2. 1年生で「非行防止教室（いじめ・ケータイ）」、2年生「非行防止教室（暴力・万引き・ケータイ）」、3年生「非行防止教室（暴力・ケータイ・性課題）」と計画的に実施し、正しい知識

を知り、自分で正しい判断ができるようにする。

3. 健康診断の結果と姿勢・からだと運動・生活習慣と疾病などの保健指導を行い、実践研究を進める。

(取組結果を検証する) 各種指標

1. 学校評価アンケート

- ⑩ 「毎日、朝ごはんを食べていますか」(生徒)
- ⑪ 「7時間以上睡眠時間をとっていますか」(生徒)
- ⑫ 「将来の夢や目標がありますか」(生徒)

2. 薬物乱用防止、非行防止、SNSなど各種教室の開催。

3. 部活動参加率

中間評価

各種指標結果

1. 学校評価アンケート

- ⑩ 「毎日、朝ごはんを食べていますか」(生徒) 1年: 6.4 2年: 6.1 3年: 5.9

→全体的に高い。「できていない」と回答した生徒はどの学年も5%未満だった。

- ⑪ 「7時間以上睡眠時間をとっていますか」(生徒) 1: 5.6 2年: 5.3 3年: 4.7

- ⑫ 「将来の夢や目標がありますか」(生徒) 1年: 5.0 2年: 4.2 3年: 4.3

→全体的に低い。一番高い値の1年生でも、「あてはまる」と答えた生徒は半数満たなかつた。

2. 薬物乱用防止、非行防止、SNSなど各種教室の開催。

1年スマホ・携帯・情報モラル教室

2年非行防止教室(6月28日)

3. 部活動参加率

運動部: 282人(62.4%)、文化部: 96人(21.1%)

自己評価

分析(成果と課題)

望ましい生活習慣を構成する早寝・早起き・朝ごはんについて、朝ごはんに関しては昨年度から引き継いだ食育に関する取り組みや家庭の協力の成果が見られている。一方で、睡眠時間は学年が上がるにつれて睡眠を十分にとれていない傾向にある。全体的に数値が低く表れた将来の展望や希望に関する項目は、昨年度と比較しても非常に低くなっている。

分析を踏まえた取組の改善

保健美化委員会と連携を図り、睡眠時間を確保する習慣を身につけていく必要がある。学年が上がると、生活リズムは自分の意志で決めていくことになるので、その時に正しい知識があることで望ましいリズムに繋がることが予想される。学校評価アンケート以外にも、取組の効果や有用性を確認する場を設ける必要がある。保健委員によりアンケートや調査を行っていきたい。

(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標

学校評価アンケート

- ⑩ 「毎日、朝ごはんを食べていますか」(生徒)
- ⑪ 「7時間以上睡眠時間をとっていますか」(生徒)
- ⑫ 「将来の夢や目標がありますか」(生徒)

薬物乱用防止、非行防止、SNSなど各種教室の開催

学校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策
	学校運営協議会でも、スマートフォンやSNS等の使用頻度が高いことが話題に挙がっている。正しい使い方の指導をすると同時に、家庭での過ごし方や睡眠の大切さを啓発する活動にも取り組んでいきたい。 また、「目標を持てる子供の育成に励んで欲しい」などの意見があったことから、今後地域や保護者、学校が共通の目的意識を持ちながら教育活動に生かしていくことを三校で確認した。

最終評価

自己 評 価	(中間評価時に設定した) 各種指標結果
	<p>学校評価アンケート（12月）</p> <p>⑩ 「毎日、朝ごはんを食べていますか」（生徒） 1年：6.3 2年：6.1 3年：5.8 →年度当初からほとんど変化なし。</p> <p>⑪ 「7時間以上睡眠時間を持っていますか」（生徒） 1：5.6 2年：5.2 3年：4.9 →3年生のみ、やや上昇傾向。</p> <p>⑫ 「将来の夢や目標がありますか」（生徒） 1年：4.6 2年：4.2 3年：5.0 →1年生は減少したが、3年生は上昇している。</p>
学校 関 係 者 評 価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題
	<p>今年度の2年生の「スマホ・携帯・情報モラル教室」は、ほとんどの生徒が家庭でスマホやタブレットを使用していることを考慮して、授業参観のタイミングで行った。参加率は低かったが、保護者にも啓発する機会になったと思う。今後も続けていくことで、指標⑪の結果に繋げていきたい。</p> <p>保健美化委員会と連携した活動も例年通り数回組めたが、その都度のフィードバックが少なかった。ただ、生徒の保健美化に関する意識調査を行うなど、foamsを活用したアンケートを行うことができ、生徒の意識を高めることに効果を發揮していたので、来年度以降も続けてていきたい。</p>

（4）学校独自の取組

重点目標
1. 小中連携を基盤とした、小中一貫教育の推進。
2. 生徒の自己有用感を高め、自尊感情を育てる「ピア・サポート」事業の継続・展開。
具体的な取組
1. 小中合同教科主任会、小中合同授業研修会の充実。

2. 共同機構久世学校運営協議会（小中合同）の充実。
3. 学校運営協議会を支える学校支援推進委員会の充実。
4. 体験的な活動を通してこども子どもたちの社会性を育む手段として、「ピア・サポート」活動に継続して取り組む。

(取組結果を検証する) 各種指標

1. 学校評価アンケート
 - ⑯「久世三校が小中一貫教育を大切にしていること」（保護者・教職員）
2. 小中3校合同教務主任会、研究主任会、生徒指導主任会、合同授業研修会の実施回数。

中間評価

自己評価	各種指標結果
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> ⑯「久世三校が小中一貫教育を大切にしていること」（実現度）…保護者 4.9 教職員 4.2」
	<p>分析（成果と課題）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月4日に久世三校小中合同研修会を開催し、大藪小学校の松井校長にご講演いただき久世地域歴史や子ども達をとりまく課題の変化について再確認し、共通理解を図った。 ・8月23日に久世三校小中合同研修会を開催し、坂田良久先生を講師に招きジブリで考える人権をテーマに意見交流をおこなった。 ・9月28日久世三校合同授業研修会を行い研究授業・研究協議を行い、久世三校での授業内容や授業方法について共通理解を図った。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>小中の教職員が集合研修できることが増え、昨年、一昨年よりは形を変えながら久世三校独自の取組をすすめることができた。しかし、従来の取組の成果を期待できるところまで的小中連携は出来ておらず、三校教務主任会や三校生指主任会、三校研究主任会がうまく機能しながら、さらに連携を深めていけるよう改善していかなければならない。</p>
	<p>（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> ⑯「久世三校が小中一貫教育を大切にしていること」（保護者・教職員） 2. 小6を迎える日、小中合同授業研修会（久世西小学校、大藪小学校）の実施
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>コロナ禍も一定の落ち着きを見せ、校区の2小学校における小小連携、中学校との小中連携がもとの形に戻りつつある。久世は1つという地域の合い言葉も踏まえ、久世中学校入学後もスムーズに学校生活を送れるよう、生徒の実態に合わせた連携を行って欲しい。</p>

最終評価

自己評価	(中間評価時に設定した) 各種指標結果
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> 「小中一貫教育の推進（実現度）…保護者 4.9→4.9 教職員 4.4→5.0」
	<p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9月から11月にかけて、3校合同授業研修会を3回実施した。小中の久世3校の教職員で児童生徒の実態を踏まえた授業力向上の一助となった。一方で「久世スタンダード」や「家庭学

評価	<p>「習のてびき」の見直しや3校での授業規律や授業方法の見直し等、来年度以降研究部を中心に取り組んで行く必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11月に小中教員交流を実施した。久世中学校の教員が一日、大藪小学校と久世西小学校で勤務し、小中の違いや自校に取り入れるべき教育活動を確認することがきた。 ・12月には小6を迎える会を実施し、体験授業や生徒会本部による学校紹介や部活動紹介は両小学校の児童に4月からの見通しを持たせる一助となった。来年度は体育館の改築工事も終了し、ピア・サポートの取組の観点からも小6を迎える日の取組をさらに有意義なものにしていく必要がある。 <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会（ピア・サポート推進会議）、3校教務主任会、3校研究主任会、3校生徒指導主任会が連携をとりながら久世地域の児童・生徒の実態に応じた付けたい資質・能力を教職員で共有し、授業改善を行っていく必要がある。また次年度、新たな久世中学校の学校教育目標の実現に向けて、教科指導のみならず総合的な学習の時間や特別活動、小中連携行事等のあり方を見直していく必要がある。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの学校評価アンケートを見ると少しづつ取組の成果があらわれている。来年度もさらに子どもたちの自己有用感を高める「ピア・サポート」の取組を進めていく必要がある。国立政策研究所の滝先生の助言やアドバイスを広く教職員で共有し、より効果的な取組へ進化していく必要がある。

（5）教職員の働き方改革について

<p>重点目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 働き方改革の推進による、教職員の心身の健康の保持・増進。 2. 働き方改革を意識した、業務改善と具体的な取組の推進。 <p>具体的な取組</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教職員の勤務状況等の適切な把握。 2. 具体的な業務改善の取組の推進。 <ul style="list-style-type: none"> ・ICTの活用による効率化など、勤務時間を意識した働き方の推進。 (電話業務の時間設定、スクリリの有効活用) <p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> ②「働き方改革を意識した業務改善を進めること」(教職員) 2. 出退勤管理システムによる勤務時間管理。 3. ストレスチェックの結果分析。

中間評価

<p>各種指標結果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> ②「働き方改革を意識した業務改善を進めること」(実現度) 教職員 4.2 2. 出退勤管理システムによる勤務時間管理 ◎時間外勤務

月	4月	5月	6月	7月	8月	
45 h 以上	15名	13名	12名	9名	0名	
80 h 以上	4名	0名	0名	0名	0名	
100 h 以上	1名	0名	0名	0名	0名	

自己評価	分析 (成果と課題)
	昨年度と比較すると 80 h 以上の教職員が 5 月以降「0」となり、働き方改革を進める上で大きな進歩と言える。45 h 以上を減らすためには、土日の部活動を地域移行にすることが早道と考えるが、なかなか現状を大きく変えられる施策が進んでいるように思えない。
	分析を踏まえた取組の改善
	<ul style="list-style-type: none"> ○定期テストの採点処理ソフトの活用。 ○学校閉鎖時刻の徹底。19時を目指す。 ○スクリレアアプリの積極的活用。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> ②「働き方改革を意識した業務改善を進めること」(教職員) 2. 出退勤管理システムによる勤務時間管理。 3. ストレスチェックの結果分析。

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策
	部活動の地域移行から、本校の男子バスケットボール部では先行的に外部企業が入って活動することとなった。今までの部活動指導員に加え企業から1名のコーチが派遣され、2名体制で休日部活動の運営に当たっている。しかし、平日は今までと変わらずに行っているので、劇的に地域移行が進んだとは言いがたい。まして他のクラブは今まで通りと言うこともあり、お金の問題がネックになるのではと言う意見が出た。

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果																												
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学校評価アンケート <ul style="list-style-type: none"> ②「働き方改革を意識した業務改善を進めること」(実現度) 教職員 4.5 (昨年度は 3.7) 																												
	<ol style="list-style-type: none"> 2. 出退勤管理システムによる勤務時間管理 <ul style="list-style-type: none"> ◎時間外勤務 																												
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>月</th> <th>9月</th> <th>10月</th> <th>11月</th> <th>12月</th> <th>1月</th> <th>2月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>45 h 以上</td> <td>14名</td> <td>15名</td> <td>15名</td> <td>4名</td> <td>7名</td> <td>8名</td> </tr> <tr> <td>80 h 以上</td> <td>2名</td> <td>0名</td> <td>2名</td> <td>0名</td> <td>0名</td> <td>0名</td> </tr> <tr> <td>100 h 以上</td> <td>0名</td> <td>0名</td> <td>0名</td> <td>0名</td> <td>0名</td> <td>0名</td> </tr> </tbody> </table>	月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	45 h 以上	14名	15名	15名	4名	7名	8名	80 h 以上	2名	0名	2名	0名	0名	0名	100 h 以上	0名	0名	0名	0名	0名	0名
月	9月	10月	11月	12月	1月	2月																							
45 h 以上	14名	15名	15名	4名	7名	8名																							
80 h 以上	2名	0名	2名	0名	0名	0名																							
100 h 以上	0名	0名	0名	0名	0名	0名																							
	<ul style="list-style-type: none"> ◎過去4年と比較 (4~1月) <p>令和5年度平均 時間外勤務時間 → 36時間12分 令和4年度平均 時間外勤務時間 → 37時間13分 令和3年度平均 時間外勤務時間 → 49時間54分 令和2年度平均 時間外勤務時間 → 39時間25分 令和元年度平均 時間外勤務時間 → 53時間20分</p>																												
	<ol style="list-style-type: none"> 3. ストレスチェックの結果分析。 																												

自己評価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>時間外勤務の人数は昨年とほぼ変わらないが、全教職員の平均時間外勤務時間は減少傾向にある。</p> <p>これは、日々のきめ細かな生徒や保護者との対応があれば、突発的な生徒、保護者対応も減っていくことも要因と考えるため、教職員間の連携が強く望まれる。</p> <p>また、45h以上になる教職員は、ほとんどが休日の部活動指導であるため、抜本的な改革がなされない限り、これ以上時間外勤務を減らすというのは難しいと考える。</p> <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>定期テストの採点処理ソフトの活用。</p> <p>学校閉鎖時刻の徹底。19時を目指す。</p> <p>スクリレアアプリの積極的活用</p> <p>留守番電話の設定時刻 18時。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>おおむね満足のいく働き方改革が進んでいる。部活動の問題は、教育委員会をはじめ各機関が連携して外部に委ねることができれば、教職員のゆとりも増えると考える。来年度は電話対応の時間設定を極力勤務時間に近づけることと、部活動の完全下校も勤務時間内に設定することを実現したい。</p>

(6) いじめの防止等についての取組に向けて

<p>重点目標</p> <p>自己肯定感と他者を思いやる心の育成</p> <p>具体的な取組</p> <p>「学校いじめの防止等基本方針」に同じ</p> <p>(取組結果を検証する) 各種指標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている。 学校のいじめ対策委員会のメンバーを、生徒に紹介している。 いじめに係る既存の「学校評価：生徒アンケート項目」を活用して、以下の項目を分析する。 <ul style="list-style-type: none"> ⑥「楽しく学校生活を送っていますか？」 ⑯「学校であったことを、家の人に話していますか？」 ⑰「困ったことやいやなことがあったら、友だちやまわりの大人に相談できますか？」 ⑯「クラスや学年、学校の仲間を大切にしていますか？」 生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を、全教職員で共有している。 保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知している
---	---

中間評価

<p>各種指標結果</p>	<ol style="list-style-type: none"> 全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている。 <ul style="list-style-type: none"> 年度当初の職員会議で、学校いじめの防止基本方針の内容を周知徹底した。また、いやな思いをしている生徒がいれば、全教職員でその課題を共有し組織的に対応した。 「学校評価：教職員アンケート」より「生徒の悩みを聴いたり、様子が気になる生徒への声掛け
----------------------	---

をすること。」の実現度が 5.6 と高く、教職員一人ひとりが生徒の様子に気を配り、生徒を大切に思いスピーディーに対応する事を心がけている。またその項目の重要度も昨年と同様に 6.9 と意識が高い、全教職員が生徒の悩みを聴いたり、些細な変化に注意して、気になる生徒への声掛けすることを重要だと思っている。

2. 学校のいじめ対策委員会のメンバーを生徒に紹介している。

- ・4月の始業式で、いじめ対策委員会のメンバーを全生徒に紹介した。
- ・「学校評価：教職員アンケート」より「悩みを人や機関に相談することの大切さをしらせること」の実現度が 5.2 と昨年度同様に高く肯定的な解答であった。

3. いじめに係る既存の「学校評価：生徒アンケート項目」を活用して、以下の項目を分析する。

- | | |
|---|----------------------|
| ⑥「楽しく学校生活を送っていますか？」 | 1年：5.9 2年 5.7 3年 5.6 |
| ⑯「学校であったことを、家の人に話していますか？」 | 1年：6.0 2年 5.7 3年 5.6 |
| ⑰「困ったことやいやなことがあったら、友だちやまわりの大人に相談できますか？」 | 1年：5.6 2年 4.9 3年 4.7 |
| ⑯「クラスや学年、学校の仲間を大切にしていますか？」 | 1年：5.4 2年 5.0 3年 5.2 |

4. 生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を共有している。

- ・毎週月曜日の生徒指導委員会で、定期的に生徒の情報共有をしている。いじめの要因があると判断した些細な事案でもその日のうちに学年で打ち合わせをして共有する
- ・いじめに係る既存の「学校評価：生徒アンケート項目」で「困ったことや嫌なことがあったら、友達や周りの大人に相談できますか」の実現度が 1年：5.6 2年 4.9 3年：4.7 「学校評価：教師アンケート項目」で「悩みを人や機関に相談することの大切さをしらせること」の実現度 5.2 で、昨年度と同じポイントで推移している。教育相談だけでなく普段の学校生活で生徒が気軽に相談できる環境を整えることに務めている。

5. 保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知している。

4月にホームページに掲載して後、保護者に対して学校だより・PTAだより・学校運営協議会等で取組を説明・周知した。

自己評価	分析（成果と課題）
	<ul style="list-style-type: none">○ いじめアンケートや教育相談においてすべての生徒から話を聞き、定期的にパトロールを行い、生徒の変容を見逃さないよう組織的に取り組んだ。○ いじめを把握した段階で、速やかに管理職に報告して、指導方針を全教職員で共通理解した。学校生活で、教師側が日々の何気ない生徒の会話や行動・変化を見逃すことなく、全教職員が生徒を見守る体制を作ることが必要だと考えられる。
	分析を踏まえた取組の改善
	<ul style="list-style-type: none">○ 今後も、生徒の変容、人間関係を注視して、いじめにつながる行動などを未然に防ぐ取組推進する。○ 生徒を見守る体制を継続し、生徒が相談しやすい環境を構築する。○ 困りに対して、生徒が自ら悩みを相談しやすい教職員一人ひとりの雰囲気作りを心掛ける。引き続き、いじめアンケートや教育相談アンケートなどを活用し、少しでも嫌な思いをしている生徒がいればいじめの初期段階ととらえ、問題解決することに努める。いじめを把握した段階で、速やかに管理職に報告して、指導方針を全教職員で共通理解する。
（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標	
1. 全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている。	

	<p>2. 学校のいじめ対策委員会のメンバーを児童生徒に紹介している。</p> <p>3. いじめに係る既存の「学校評価：生徒アンケート項目」を活用して、以下の項目を分析する。</p> <p>⑥「楽しく学校生活を送っていますか？」</p> <p>⑯「学校であったことを、家の人に話していますか？」</p> <p>⑰「困ったことやいやなことがあったら、友だちやまわりの大人に相談できますか？」</p> <p>⑱「クラスや学年、学校の仲間を大切にしていますか？」</p> <p>4. 児童生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を共有している。</p> <p>5. 保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知している。</p>
--	--

学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>色々な課題や特性を持っている子が居る中で、落ち着いた学校生活を送れるように、普段から目立たない子にも意識して接する事が出来様に注意し、常に危機感と緊張感を忘れずに、今後も子どもたちが安心して学校生活を送れる環境づくりを推進してほしい。</p>
-----------------------------	---

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <p>1. 全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている。</p> <p>2. 学校のいじめ対策委員会のメンバーを児童生徒に紹介している。</p> <p>3. いじめに係る既存の「学校評価：生徒アンケート項目」を活用して、以下の項目を分析する。</p> <p>⑥「楽しく学校生活を送っていますか？」</p> <p>⑯「学校であったことを、家の人に話していますか？」</p> <p>⑰「困ったことやいやなことがあったら、友だちやまわりの大人に相談できますか？」</p> <p>⑱「クラスや学年、学校の仲間を大切にしていますか？」</p> <p>4. 児童生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を共有している。</p> <p>5. 保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知している。</p>
--	---

自己 評 価	<p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>① 全教職員が、生徒の変化や変容に気づき、生徒のいじめにつながる行動や言動を未然に防ぐことの大切さを高く意識し、実現しようと努めている。またいじめを把握した段階で、速やかに管理職に報告して、指導方針を全教職員で共通理解できた。</p> <p>② 全教職員が、生徒と保護者の悩みを受け入れ、組織として対策することの大切さを高く理解し、実現に向かっている。またいじめアンケートや教育相談においてすべての生徒から話を聞き、気になる生徒に関しては、学校全体で情報を共有し、組織的にいじめ対策に取り組んだ。</p> <p>③ 学校であったことを家の人に話さない生徒がわずかであるか増加している。それに反して、悩みがあれば友達や周りの大人に相談する生徒は、学年によりばらつきがあるが肯定的な回答である。家庭での家族関係をしっかりと把握する必要があると考えられる。</p> <p>④ 定期的に行われる生徒指導委員会の内容を全教職員に周知し、生徒理解に努めることができた。</p> <p>保護者と地域が学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を理解し、困ったことがあればすぐに連絡・相談・連携ができる関係が築けた。</p>
--------------	--

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 全教職員が引き続き生徒の悩みを聴き、気になる様子の生徒がいれば声掛けをすることの大切さを今以上に意識できるような発信と、ワンチームとして実現できるような体制を構築して、今後もいじめにつながる行動などを未然に防ぐ取組を推進する。 ② いじめアンケートを活用し、嫌な思いをしている生徒を全教職員で把握し、見守る体制を継続する。生徒が気軽に悩みを相談しやすい環境づくりと教職員一人ひとりの雰囲気作りを心掛ける。 ③ 生徒の家族関係の把握に努め、教員が家庭内での保護者と生徒の「調節役」となり、生徒と保護者の抱える悩みや不安を解決できるように努める。 ④ 引続き、生徒指導委員会の内容を全教職員に周知し、生徒理解に努める。 引続き、保護者に対して学校だより・PTAだより・学校運営協議会等で取組を説明・周知する。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>いじめを受けていると感じる子どもの悩みを聞くことがあるが、それを担任の先生に伝えることを拒む。その理由が、「好きな先生から、いじめを受けて悩んでいると思われたくない」ということであった。いじめを受けることのつらさより、自分側に立ってくれる人たちに、今の自分の置かれた立場が知られてしまうことの方がつらく思うという新たな視点を突きつけられ、どう言葉をかけば良いのかわからない。感受性の高い子どもたちに寄り添うことの難しさを痛感したと同時に、先生たちにはそういう考え方があることを知った上で、子どもに向き合って欲しい。</p>